

「あるべき」でなく「あるがまま」

(ルカによる福音書 14:25-33)

十字架が待つエルサレムへの旅に、大勢の群衆が一緒について来ました。主イエスはその群衆の方へ振り向き、弟子の条件を語ります。弟子とは、「イエスのもとに行き、父や母などを憎み、自分の十字架を背負い、イエスの後を行く」人だということです。つまり、「十字架」とは殉教というよりも、父や母などに代表される日常的な人間関係に関わることだということです。

あるがままの人間は様々な欠点を持っています。それゆえ、受け入れ合うことは困難です。しかし、わたしたちが担うべき十字架とは、共に生きるべき、欠点に満ちた「あるがままの相手」のことなのです。わたしたちは往々にして、お互いに「役割」や「あるべき」とされるところに自らや他者を置くことで、安心できる世界を作り、その中で生きようとします。しかしそこに、「あるがままの相手」との関係性を阻害するものが生まれます。人が勝手に作り上げた、「あるべき」父親像、母親像、妻像、子ども像といった理想や姿との比較のなかで、わたしたちはそこに収まらない他者を受容できず、「あるがまま」を受け入れることができなくなってしまうのです。主イエスは、その「像」を憎みなさい、と言われていたのです。

目の前の「あるがままの相手」と共に生きることは、究極的には、主イエスがそうされたように、自らの命を相手のために捧げる生き方です。それが、「自分の命を憎む」ということであり、「自分の持ち物を一切捨て」ということです。「自分の持ち物」とは、財産や所有物だけではありません。自分が「命」ほどに大切だと思い込んでいる理想や価値観、夢と言ったものも含まれます。それらは結局、自分の考える価値を中心にした生き方へとつながるものです。それを手放し、「あるべき」ではなく「あるがまま」の相手と生きること、そういったものをすべて捨てても、「あなたと一緒に生きる」ことを選んで生きようとする。それこそ、主イエスの後に従うということなのです。

そう生きるには、今日の福音の後半で「まず腰をすえる」と二回繰り返されているように、まず腰を据え、今まことに大事なことは何か、向き合わなければなりません。「わたしと神さま」、「わたしと隣人」との関係性を妨げているものは何かと、自らの信仰生活を顧みるなら、この主イエスの言わんとしていることが分かるのではないのでしょうか。それらを一旦捨て、神の思いに従う歩みが求められています。